

“三度の再生”を成し遂げた 鶴之湯旅館の今、そして未来へ

地域と共に生きる 曾祖父から受け継ぐ温泉宿

日 本三大急流の一つ球磨川の両岸に広がる八代市坂本町。四季の移ろいの中で様々な表情を見せてくれるこの地には、今なお日本の原風景が残り、大自然に身を委ねると、何とも穏やかな時間が流れていきます。

創業当初は、荒瀬ダム遊覧で訪れる観光客や県内外の漕艇部会館で賑わいを見せていましたが、ダム撤去後は利用客が減り休業状態に。「どうにか曾祖父からつなげてきた旅館を守りたい」と奮起したのが4代目となる土山大典さんです。しかし10年ぶりに営業再開した翌月に熊本地震が発生。ようやく走り始めたところで試練でした。

そして、いつもは穏やかな川の流れがさまざまな音を立て、人々の暮らしを一変させた2020年7月4日。自然の脅威がまたもや牙をむいたのです。未明からの雨でみるみる水位が増し、宿泊客を裏庭からトンネルの上に避難させる状況下でも脳裏に浮かんだのは、「自分が必ず守る」という想いだけでした。曾祖父の代から続く宿

鶴之湯旅館再生への歩み

1954年	創業
2007年	一時休業
2016年 3月	営業再開
4月	熊本地震
2020年 7月	令和2年7月豪雨
2021年11月	一部営業再開
2024年 2月	かさ上げ工事で一時休業
2025年12月	営業再開



防災無線の連絡から1時間後には、旅館の玄関前まで押し寄せた濁流。息つく間もなく1階部分は全て流されてしまい、柱だけがむき出しに。



取材文 大平智子(ゆき) 球磨川温泉 鶴之湯旅館 オーナー 土山 大典さん(43才) 1982年熊本生まれ。ルーテル学院大、高麗大を卒業後、韓国の飲食店に勤務。帰国後は通訳・翻訳者として活動。2016年から鶴之湯旅館の4代目として旅館経営に力を注ぐ。

域の方々の想いを受け取り、未来へとつなぐ場にもなっています」と語ります。2メートルのかさ上げ工事など、全ての工事が完了し、営業を再開したのが2025年12月。「豪雨災害前に宿泊いただきたいお客様が、こころに結ばれたい」とご予約くださり、こころに間に合わせる事ができました。昭和時代にタイムスリップしたかのような見事な木造建築に加え、宿を包み込む山々、球磨川から聞こえてくる静かなせせらぎ。土山さんが自ら育て、獲ってきた地元食材を使った心づくしの料理の数々が雲に華を添えます。「豪雨災害後、民家が解体されたり新しい橋が架けられたり。見慣れた風景から変わったところもたくさんありますが、豊かな自然がもたらすこころの暮らしは以前のままです」と微笑みます。

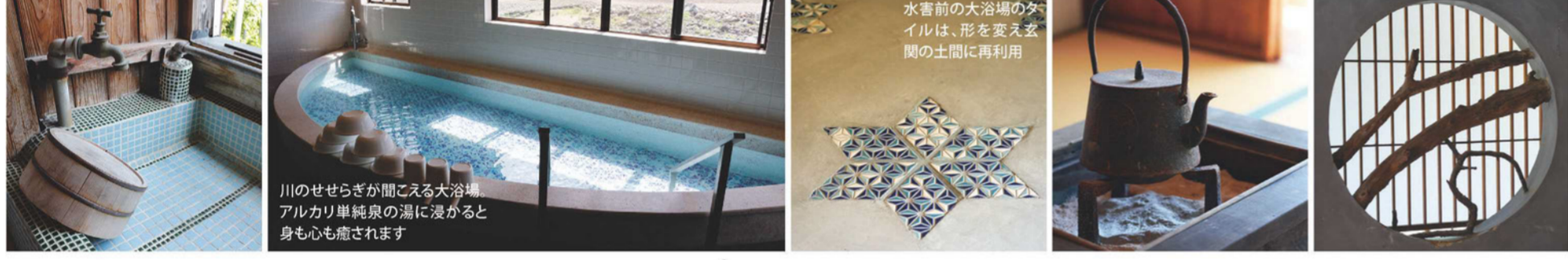
70年の歳月を超え、鶴之湯旅館を拠点としてつなげた人々の縁、想い、知恵がこの地に新たな風を巻き起こしそうです。 ◆ 水が引くと普通客はもちろん、全国から寄せられる支援が力となり、再建へ向け再スタートを切った土山さん。コロナ禍で現地の復旧作業に足を運ぶことが難しい人や専門家も加わり「鶴之湯の恩返しプロジェクト」を結成。資金調達のためのクラウドファンディングの準備や、新たなロゴ、HPの立ち上げが復旧を後押ししました。 また土山さんの声かけにより、地域の方からは、取り壊しになる家屋のふすまなどが託されることに、「鶴之湯の再建は、地



鶴之湯旅館の建物を見渡してみると、それぞれの箇所に70年の長い歴史を刻むストーリーがあります。建物をめぐりながら振り返ってみましょう。



建物探訪 写真で見ると



貴重&レアな音響機器

家電やオーディオ機器の販売修理店「ラジオクロネコ」の故・森精一さん。生前は土山さんと親交があり、ずっと鶴之湯旅館を支援していました。真空管アンプ、スピーカーは豪雨災害後の再開祝いに贈られたもの。(右)坂田道元衆議院議員が英国留学中に使用していた音響機。

We're 鶴之湯旅館 応援団!!

度重なる苦難の中で、共に考え、伴走してくれる仲間の支えは計り知れません。鶴之湯旅館の再生のために尽力した応援団の声を紹介します。

被災しても前向きに新たなことに挑戦し、行動できる志が人をつなぐ

雑誌の取材で八代を訪れ、「面白い人がいる」と紹介してもらったのが最初の出会いです。災害支援アドバイザーの活動をしていることもあり、線状降水帯のニュースを見てすぐに土山さんに連絡しましたが、既に旅館は浸水し始めている状態でした。とにかく垂直避難するよう呼びかけました。当時はコロナ禍で被災地に入ることはできません。遠くからできる支援をと考え、ボランティアのマッチングサービスを紹介したり、自動車メーカーの災害支援をつなぎ給電支援をサポートしたり。コロナが落ち着いた後は坂本に通って、現場での復旧から地域全体の復興につながる支援を行っていました。災害支援の現場で感じるのは、「被災しながら前向きに新しいことに挑戦できる人が大切」ということ。苦境の中でも前進する土山さんの行動力と志が、伴走したくなる気持ちを掻き立てるのだと思います。今では支援というよりも、一緒に面白いことをやっている仲間です。これからも坂本町に人を呼ぶ、面白い仕組みと一緒に作っていかれたらと思います。

走り出す中で、私はHPの予約システムの構築やクラウドファンディングでの資金調達の準備、営業開始後は結婚式のコーディネートなどに関わりました。歴史的建物の修復については、寺をどう保持していくかという私自身の課題とも重なり、勉強させてもらったので、鶴之湯に行けたのは発災後、2週間経ってからでした。『鶴之湯の恩返しプロジェクト』が立ち上がり、建築の専門家や災害コーディネーターなど様々な仲間がオンラインで集まり、週に1回鶴之湯の再建に向けて

味わう 鶴之湯旅館のおもてなし料理



お問合せ 球磨川温泉 鶴之湯旅館 Tel.0965-45-8050 〒869-6111 熊本県八代市坂本町葉木1007-2

QRコード: HP, X(旧Twitter), Instagram, Google Map

鶴之湯旅館の 建築的価値

宿泊客を非日常へと誘う 重厚な玄関装飾にも おもてなしの心

江 戸時代には禁止されていた木造3階建ての建築物。現存する木造3階建ての建物は明治期以降、昭和34年の建築基準法改正以前の90年間認められた構法のもので、総木造3階建て、地下1階の鶴之湯旅館は、この構法の晩年期に建設された非常に貴重な建築物と言えます。

中でも特徴的なのが、入口の重厚さ。荒瀬ダムの遊覧客の宿泊施設として生まれた宿ということもあり、球磨川を活かしお客様をもてなす仕掛けが随所に見られます。

葉木駅から船に乗って旅

館横の船着き場へ。船から降り立つ客を迎える重厚な5層の入母屋造りの屋根は、まるで竜宮城を訪れたかのような、非日常を感じられる空間だったに違いないでしょう。

そして玄関に据えられている大きな丸柱(写真①)。その上部には、寺社建築の伝統のデザインを和洋折衷で施してあるほか、玄関横にも床の間(写真②)が設けられるなど、最高のおもてなしの始まりを予感させます。さらには1階から3階まで張り巡らされた総ガラス張りの掃き出し窓(写真③)。どの部屋からも川を眺められる造りは、球磨川と共にある宿ならではの設計と言えるでしょう。

修復の過程では、鶴之湯旅館をどう保存していきたいかというオーナーである土山さんの想いが汲みながら、何度も話し合いを重ねました。建築は文化そのもの。至る所に、その時代や地域の暮らしが見えてきます。その歴史を語り継いでいくことが、建物の新たな価値となっていくはず。◆

球磨川に寄り添うように静かに佇む鶴之湯旅館(写真④)。入口2階部分の外壁に設けられたハート型の猪目下地窓(写真⑤)やコウモリを模した透かし欄間(写真⑥)には、魔除けの意味も。東の間の非日常を存分に楽しんでほしいという宿主の想いが見えます。



熊本高等専門学校 建築社会デザイン工学科教授 森山 学さん(53才) 1972年、石川県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。99年から熊本高等専門学校で教鞭をとり、建築の歴史文化を活かしたまちづくりにも関わる。